

メモ 最近はやりのカーテンは、インテリアと連動したシンプルモダン。色はベージュで、無地か、無地に近い細かい柄を選ぶ人がほとんどだ。売れるカーテンの半数以上が「遮光」という。「日中、光を遮って寝なければいけないほど、夜中、働いている人が多くなったのでしょうか」と牧野さんは話す。遮光のほか、防火や防寒、遮熱といった機能に加え、形状記憶カーテンも丸奈は製造している。ネットに入れて5、6回洗濯しても、雑誌やカタログで見られるような美しいひだが保たれる。カーテンも進化を続けている。

記者から 転勤のたびにカーテンを買っていたが、数年で不用になるには高い品だった。丈が合わなくても仕方ないと思ひ、使い回すようになった。数年前から海外産の安価なカーテンが量販店に並んでいるが、牧野さんに「国産の方が織り目や柄が細かいです」と教えてもらった。日々の暮らしの彩りに欠かせないカーテン。選び方を考えなきゃと思った。

読者から □「つくる」の「このわた」は、深く印象に残りました。ナマコの輪切りの酢漬は大好物、ナマコのこのわたも無論ですが、なかなか口に入りません。つまみには最高です。しかし、工程は時間がかかり苦労もあり、大変です。東海の元気な人、声援したいです。元気を分けてください。(愛知県豊川市 57歳男性)

□このわたは、聞いたことはありますが、どのような食べ物かわかりませんでした。ナマコの腸から作られるのですか。サワラの木で作った桶(おけ)に詰めれば、長持ちするのですか。高級品なのでめったに口にしませんから。(津市 58歳女性)

今回の工程表

カーテン

1 織る前に縦糸、横糸を準備する。写真は縦糸



2 織機で生地を作る。模様を入れることもできる



3 光を当てて織り上がった生地を目視でチェックする検反



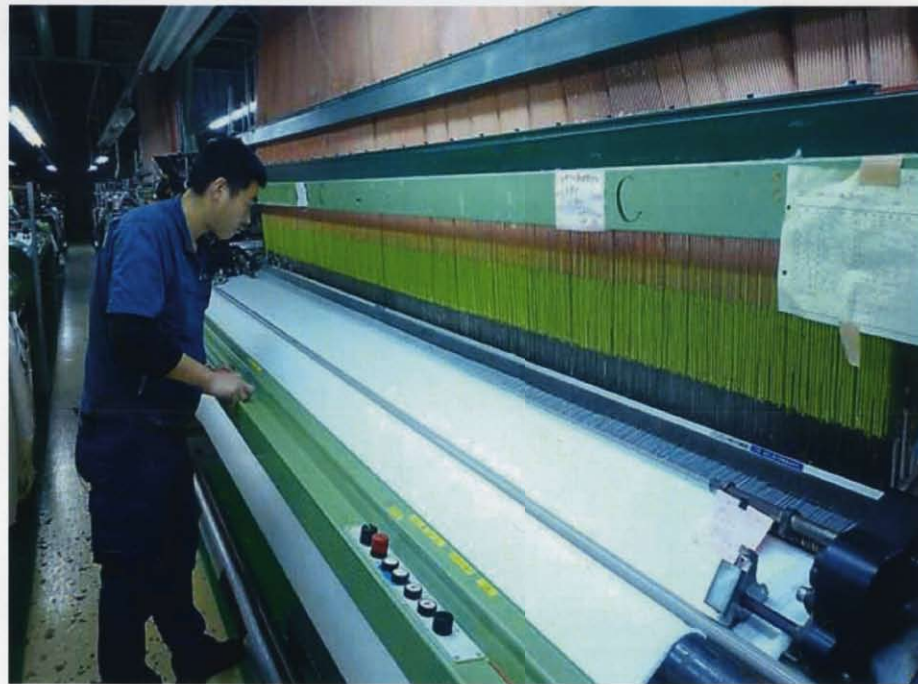
4 縫製。カーテンのひだもこの時点で作られる



5 取り付け作業



動画は、カーテンづくりの様子を撮りました。20日まで配信。「iPhone」は、http://asahi-nagoya.com/iphから見られます。



① 生地の元になる横糸を巻き付けて大きな玉を作る作業。いずれも愛知県豊川市御津町の丸奈の本社工場

② 幅4.5メートルのテールクロスを織るジャカード織機。カーテンも織れる。日本ではこれほど大きな織機は珍しい

つくる

カーテン

元氣東海

新生活を始める時、必要になるのがカーテン。窓の数や大きさが違ってくるため、多くの人が新しく購入する。そのカーテン生地の大産地が、愛知県三河地方だ。インテリア生地メーカー「丸奈」(愛知県豊川市)は、国内最大級の生産量を誇る。大手メーカーから委託された商品も織り、1カ月で幅1.5メートルの生地にして東京、神戸間にあたる約600キロ分を織ることができる。創業者の牧野奈

一大産地 糸つむぎ生活彩る

尾治さんが1948(昭和23)年、織機4台で始めた。今は23ギヤードイツ、イタリア製のジャカード織機、ドビー織機が70台以上並び、工場は24時間稼働している。原糸はすぐには織れず、仕入れた縦糸と横糸をそれぞれ加工する。仕入れたままの横糸は1巻き当たりの長さが短く、作業効率が落ちるため、4〜6本分を一つに巻き取る。縦糸は幅や長さを決めて巨大なボビンに巻き付ける。訪れると、幅4.5メートルのテールクロスがジャカード織機で織られていた。テールクロスはカーテンと同じ織り方。素材も同じポリエステルが中心だ。幅広い織機がなかったころは縫い合わせていた。広げると縫い目が膨らみ飲み物の瓶やグラスが倒れやすかったが、そうした心配もなくなった。

取締役営業部長の牧野泰広さんは「これほど幅が広い生地が織れる織機は日本では珍しいんですよ」。自慢の織機だ。花柄から人の顔といった入り組んだ模様も織れる。でき上がった布に傷がないかチェックする検反では、傷は長さ50センチで2カ所までと、かなり厳しい基準を設けている。

三河地方は江戸時代から綿作、綿織物が盛んだった。三河織物工業協同組合によると、この地方に最初に綿が伝わったのは8世紀末、工業化が始まったのは1875(明治8)年という。布の買い継ぎ商、小田時蔵が織機20台を購入して自宅2階に農家の女性を集めて綿織物づくりを始めた。2色以上の色糸を使った縞模様の木綿地「三河縞」が有名になり、東海道線が開通した88年以後、静岡や山梨、群馬、信州などに販路を広げた。関東方面への需要は増え続け、明治末期には動力織機を導入して生産を拡大させた。

太平洋戦争後は衣料不足からガチャンと織れば1万円もかかる、と言われた「ガチャン景気」が到来し、好景気に沸いた。1952(昭和27)年には1千を超えた業者は、生産拠点が中国などアジアに移り、安い商品が出回り、現在は78社に減ってしまった。

業界は生き残り策を模索する。「丸奈」では、2004年から自社ブランド「venio」(ヴェニオ)を立ち上げた。一流メーカーの商品に比べて遜色ない織りで仕上げ、アジア勢にも対抗していくという。三河織物工業協同組合は「自社で製造、販売することにこだわる生き残りへの打開策」と言う。(山口恵理子)